

単語の韻律における日・韓両言語の対照

—— 韓国語が母語の場合の母語の干渉を中心として ——

金 仁 和

1. はじめに

1.1 研究の目的

日・韓両言語は類似点が多く、母語が韓国語である日本語学習者（本研究ではこれを KL と略称する）は語彙、文法、文型等の様々な側面から他言語を母語とする日本語学習者より学習進歩が早いことが予測される。しかし韻律においては、他言語を母語とする学習者と同様で、上級の学習者にもかなりの誤りが見られる。その原因の一つが母語である韓国語の干渉である。学習者の韻律的な誤りを修正するためには、その重要な原因である母語の干渉の内容を究明することが必要であると考えられる。干渉の内容は両言語の韻律の相違を対照することから明らかになる。

本稿と関連した日本語と韓国語の韻律の対照研究は、ほとんどないに等しい。関光準（1990）は、日本語と韓国語の大邱方言のアクセントを対照し、両言語が高低変化を重要な特徴としていることと、語の持続時間における両言語の差が大きいのことを音響的分析を通して考察している。拙稿（1992）は、韓国語を母語とする日本語学習者が、日本語の文を発話する際、母語のイントネーションの干渉が起きるということをも文末イントネーションを中心に対照した。韓国語を母語とする日本語学習者の数と、日本語における韻律の重要度を考慮すると、日・韓両言語の対照研究に韻律という課題はより積極的に扱われるべきであろう。

本稿では韓国語の単語の韻律と同じ意味の日本語の単語の韻律を比較し、その相違を対照する。具体的には、学習者の日本語に対応する母語（韓国語）の単語の韻律的な特徴が日本語の韻律にどのような干渉を起こすかを考察する。この対照研究を通して干渉の内容と原因を把握することが可能になる。その結果は、日本語の正しい韻律の教育に利用できると考えられる。

1.2 研究の方法

本稿では日本語の単語を対照の基準とした。対象とした単語は漢字で表記される語である。¹ 表記が漢字である単語は、日・韓両言語において共通の文字であるため、韓国語母語学習者にとって比較的学習しやすい語彙群である。しかし、その表記と意味の類似が韻律において誤りを起こす大きな原因となる。即ち、韓国語と日本語において漢字は、肯定的であれ否定的であれ母語の干渉を受け易い。そこで、今回の対照ではその対象を漢字で表記される語に限定する。具体的には、日本語の漢字で表記される語が韓国語にあるかどうか、また韓国語にある場合その韻律パターンが同じかどうかにより、対象とした単語を16組に分類して対照・分析する。

韻律は機械（「音声録聞見 Ver. 4」使用）により分析・対照した。音声の研究が機械による分析に偏るのを警告した C. Painter (1979) も訓練された耳での聴取が重要であるが、その結果の確認と程度の計量には必要であることを認めている。本稿は日・韓両言語の韻律の微妙な相違を究明し、言語教育における韻律の誤りを修正することを目的にしているので、機械を利用した実験と分析が不可欠である。

1.3 実験の過程

1.3.1 音声資料提供者についての情報

この実験のための音声資料提供者は、日本人2名、韓国人7名、計9名である。

日本人：男（1名、26才）、女（1名、29才）

東京都出身、日本語教育専攻の大学院生

韓国人：男（3名）女（4名）、22～32才

ソウル出身、体育・芸術学専攻の大学院生

1年2カ月～3年の日本語学習歴があり、1年以上日本に居住

1.3.2 実験の方法と所要時間

個人別に実験し、所要時間は日本人の場合約30分、韓国人の場合約50～60分であった。その進行順序は次の通りである。

日本人：日本語の単語を読ませてそれを録音する。

韓国人：日本語の単語（ふりがなと韓国語でその意味が書いてある）を読ませてそれを録音する。

韓国語の単語を読ませてそれを録音する。

1.3.3 録音の条件と分析プログラム

実験の前10分ぐらいの雑談でなるべく音声資料提供者をリラックスさせた。録音した資料は筑波大学において、「音声録聞見」(version 4 : Imagawa, H. & S. Kiritani, 1989) を使って分析した。

1.4 記号の説明

本研究では記述を簡略化するため次のような記号を用いた。

J	日本語	K	韓国語
JW	日本語の単語	KW	韓国語の単語
KL	韓国語母語学習者		

JW 1 日本語の単語 (平板型)

JW 2 日本語の単語 (頭高型)

JW 3 日本語の単語 (中高型)

JW 4 日本語の単語 (尾高型)

KW 1 a JW 1に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で、平声調である

KW 1 b JW 1に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味だが、平声調ではない

KW 2 a JW 1に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で使われていないが、平声調である

KW 2 b JW 1に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で使われていないし、平声調でもない

KW 3 a JW 2に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で、下降声調である

KW 3 b JW 2に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味だが、下降声調ではない

KW 4 a JW 2に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で使われていないが、下降声調である

- KW 4 b** JW 2に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で使われていないし、下降声調でもない
- KW 5 a** JW 3に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で、上昇下降声調である
- KW 5 b** JW 3に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味だが、上昇下降声調ではない
- KW 6 a** JW 3に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で使われていないが、上昇下降声調である
- KW 6 b** JW 3に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で使われていないし、上昇下降声調でもない
- KW 7 a** JW 4に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で、上昇声調である
- KW 7 b** JW 4に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味だが、上昇声調ではない
- KW 8 a** JW 4に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で使われていないが、上昇声調である
- KW 8 b** JW 4に対する韓国語の単語で、日本語と同じ意味で使われていないし、上昇声調でもない

韓国語のピッチパターンを表す平声調、下降声調、上昇下降声調、上昇声調という用語は、先行研究で適切な用語が見つからなかったので、中世韓国語の声調を参考にして筆者が名付けたものである。日本語でのピッチパターンの分類と韓国語でのピッチパターンの分類とは必ずしも一致するとは言えないだろうが、本稿では平板型と平声調、頭高型と下降声調、中高型と上昇下降声調、尾高型と上昇声調をほぼ同じ概念で使用する。

2. 干渉の内容と程度

2.1 対照する韻律

韻律とは、発話の強弱、ピッチ、長短などの要素である。この韻律は言語により意味に関わる程度も異なる。

韻律の対照は対象になる言語の韻律的な特徴から行うべきである。本稿は日本語を中心とした韻律の対照であるので、日本語の単語の韻律の特徴であるピッチに対照の範囲を限定した。

韓国語の単語の韻律はピッチより強弱中心だと言えよう。² 韓国語の共通語でのピッチは、日本語とは異なり、意味弁別には関わらない。それから、音節の数も韻律に影響を及ぼさない。しかし、韓国語の単語にもピッチの標準があり、³ かなり強い規則性を持っている。⁴ 本稿では、韓国語の単語におけるこのような特徴を持つピッチが日本語の単語のピッチにどの程度の干渉を起こすかを分析した。

2.2 対照の対象とする単語

JW をピッチパターンにより JW 1～4 に分け、それに対応する KW が同じ意味で同一の漢字を使っているかどうかにより KW 1～8 に分ける。更にそのピッチパターンが同じかどうかにより KW 1～8 を a, b に下位分類する。

以下にこのようにしてできた16組の KW が JW のピッチパターンにどう干渉するか、その干渉の内容は KW の16組のそれぞれの特徴と関係があるかどうかを分析する。

2.3 干渉の内容

実験した語数は、JW については JW 1 (平板型) が50語、JW 2 (頭高型) が50語、JW 3 (中高型) が25語、JW 4 (尾高型) が50語の計175語と、それに対応する KW が175語である。

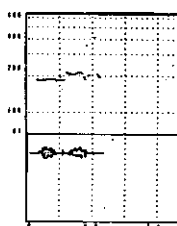
上記の JW 1, JW 2, JW 3, JW 4 の例としては、次のものがある。⁵

JW のピッチパターン		KW が同じピッチパターン	KW が違うピッチパターン
平板型	K と同意味 K と異意味	JW 1-1/KW 1a: 水 - mul JW 1-3/KW 2a: 遠慮 - yeomnyeo	JW 1-2/KW 1b: 爪 - sonthop JW 1-3/KW 2b: 芸者 - kisaeng
頭高型	K と同意味 K と異意味	JW 2-KW 3a: 空 - hanuel JW 2-KW 4a: 本屋 - chaekppang	JW 2-KW 3b: 肩 - eokkae JW 2-KW 4b: 家賃 - cipse
中高型	K と同意味 K と異意味	JW 3-KW 5a: お菓子 - kwaja JW 3-KW 6a: 網戸 - mangchang	JW 3-KW 5b: 試験 - siheom JW 3-KW 6b: 花屋 - kkotccip
尾高型	K と同意味 K と異意味	JW 4-KW 7a: 波 - phado	JW 4-KW 7b: 夏 - yeoruem JW 4-KW 8b: 方 - pun

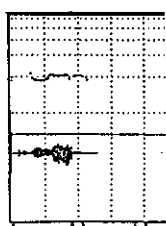
これらは JW が韓国語で同じ漢字で同じ意味を表すかどうかにより KW 1, 3, 5, 7 (同じ意味で使われている) と KW 2, 4, 6, 8 (同じ意味で使われていない) に二分される。更に, JW のピッチパターン (平板型, 頭高型, 中高型, 尾高型) に対して KW のピッチパターン (平声調, 下降声調, 上昇下降声調, 上昇声調) が同じであれば KWa, 同じでなければ KWb とした。

それでは, これらの語の日本人のピッチグラフと, それぞれに対応する KW と JW のピッチグラフを比較して見よう。グラフは上の表で示した単語を例とした。

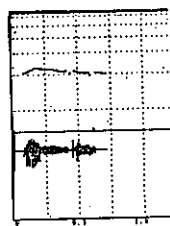
グラフ 1: 日本人の JW 1 (平板型)



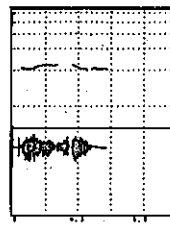
JW 1-1 水 (Kに有)



JW 1-2 爪 (Kに有)

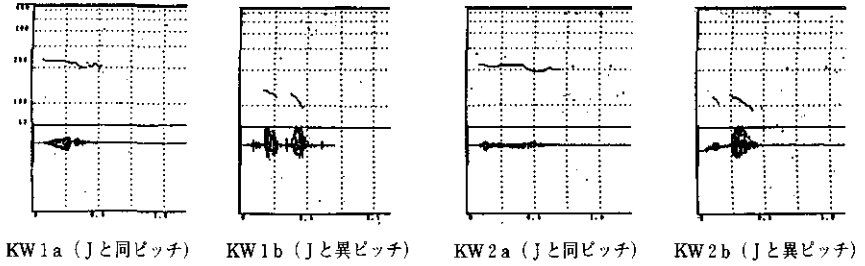


JW 1-3 遠慮 (Kに無)

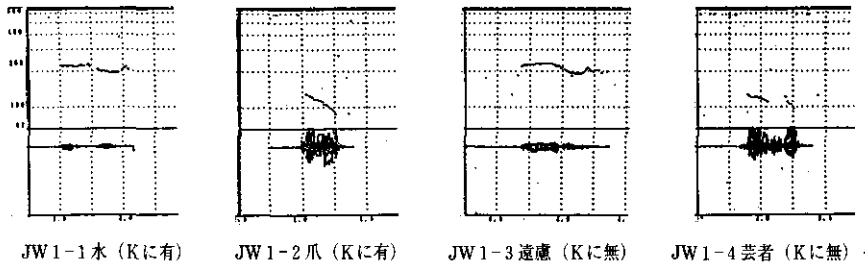


JW 1-4 芸者 (Kに無)

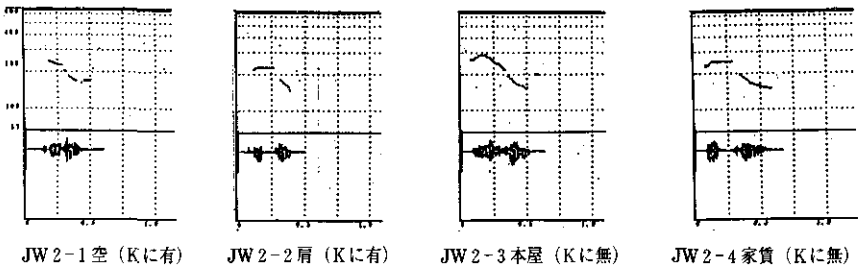
グラフ 2 : KL の KW 1 (mul, sonthop), 2 (yeomnyeo, kisaeng)



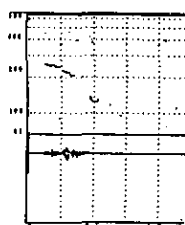
グラフ 3 : KL の JW 1



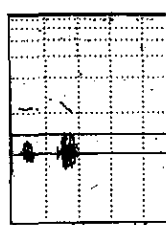
グラフ 4 : 日本人の JW 2 (頭高型)



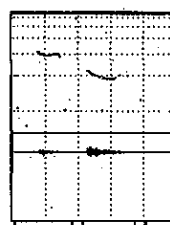
グラフ5 : KL の KW 3 (hanuel, eokkae), 4 (chaekppang, cipse)



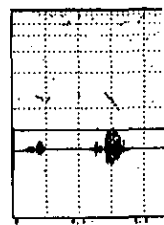
KW 3 a (Jと同ピッチ)



KW 3 b (Jと異ピッチ)

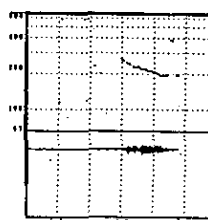


KW 4 a (Jと同ピッチ)

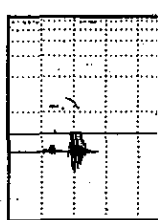


KW 4 b (Jと異ピッチ)

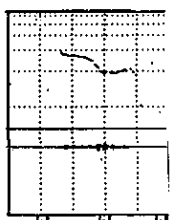
グラフ6 : KL の JW 2



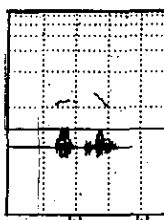
JW 2-1 空 (Kに有)



JW 2-2 肩 (Kに有)

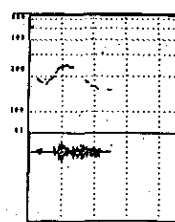


JW 2-3 本屋 (Kに無)

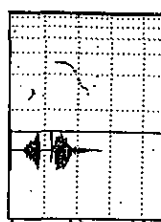


JW 2-4 家賃 (Kに無)

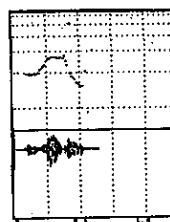
グラフ7 : 日本人の JW 3 (中高型)



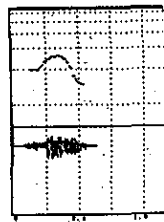
JW 3-1 お菓子 (Kに有)



JW 3-2 試験 (Kに有)

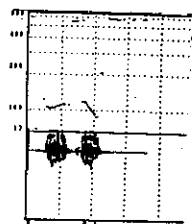


JW 3-3 網戸 (Kに無)

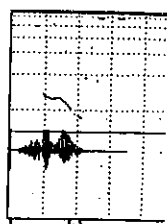


JW 3-4 花屋 (Kに無)

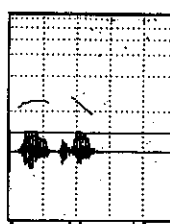
グラフ8：KLのKW5 (kwaja, siheom), 6 (mangchang, kkotccip)



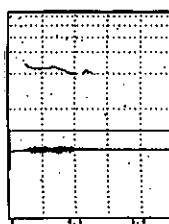
KW5a (Jと同ピッチ)



KW5b (Jと異ピッチ)

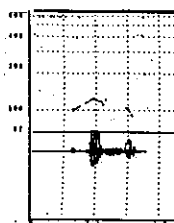


KW5a (Jと同ピッチ)

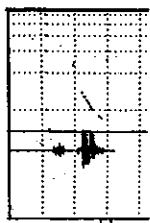


KW5b (Jと異ピッチ)

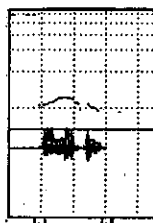
グラフ9：KLのJW3



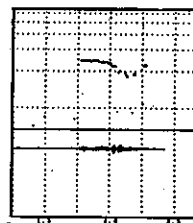
JW3-1 お菓子 (Kに有)



JW3-2 試験 (Kに有)

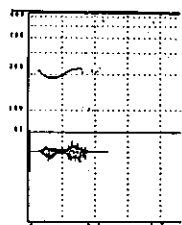


JW3-3 網戸 (Kに無)

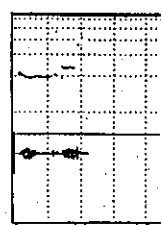


JW3-4 花屋 (Kに無)

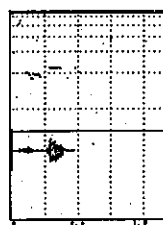
グラフ10：日本人のJW4 (尾高型)



JW4-1 波 (Kに有)

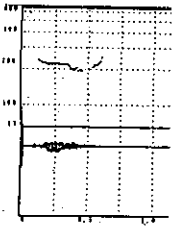


JW4-2 夏 (Kに有)

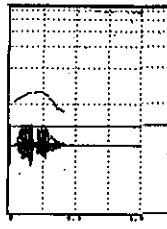


JW4-4 方 (Kに無)

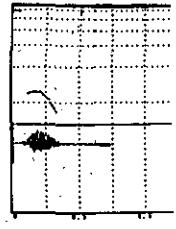
グラフ11：KLのKW7 (phado, yeoruem), 8 (pun)



KW7a (Jと同ピッチ)

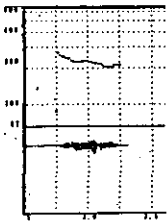


KW7b (Jと異ピッチ)

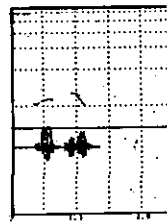


KW8b (Jと異ピッチ)

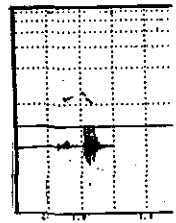
グラフ12：KLのJW4



JW4-1波 (Kに有)



JW4-2夏 (Kに有)



JW4-4方 (Kに無)

以上のKLが発音したJWは母語(KW)の強い干渉を受けていることがグラフから分かる。対象としたJW175語と、それに対応するKW175語、全ての分析結果を表で示すと次の通りである。

JW	KW	KWの韻律の干渉を受けたKLのJW
1 (42)	1 a (22)	20
	1 b (10)	9
	2 a (3)	2
	2 b (5)	5
2 (48)	3 a (27)	22
	3 b (2)	1
	4 a (7)	5
	4 b (3)	2
3 (23)	5 a (6)	5
	5 b (3)	1
	6 a (3)	2
	6 b (5)	4
4 (45)	7 a (35)	31
	7 b (3)	3
	8 a (0)	0
	8 b (4)	2

表の中で、JWの()の数字は被験者の日本人2名ともに同じピッチパターンを見せた場合の数であり、KWの()の数字はKLの7名の中5名以上が同じピッチパターンを見せた場合の数である。

分析結果の表を分かり易く整理してみよう。まず、日本人被験者から得たJW 175語の内、平板型JW42語、頭高型JW48語、中高型JW23語、尾高型JW45語がピッチパターンの一致を見せ、対照に適した資料となった。それに対して、KLから得たKWでは、平板型JWに対応するKW40語、頭高型JWに対応するKW39語、中高型JWに対応するKW17語、尾高型JWに対応するKW42語がピッチパターンの一致を見せ、対照に適した資料となった。

KLが発音したJWに見られる母語(KW)の干渉は二つの側面から考察できる。その一つは、干渉が肯定的であるか否定的であるかという側面からの考察である。肯定的干渉とは、KWの平声調(KW 1 a, KW 2 a)がJWの平板型に、KWの下降声調(KW 3 a, KW 4 a)がJWの頭高型に、KWの上昇下降声調(KW 5 a, KW 6 a)がJWの中高型に、KWの上昇声調(KW 7 a, KW 8 a)がJWの尾高型に干渉を起こし、結果的には正しいJWのピッチを実現

させたということである。その反面、否定的干渉とは、平声調ではない KW (KW 1 b, KW 2 b) のピッチが JW の平板調に、下降声調ではない KW (KW 3 b, KW 4 b) のピッチが JW の頭高型に、上昇下降声調ではない KW (KW 5 b, KW 6) のピッチが JW の中高型に、上昇声調ではない KW (KW 7 b, KW 8 b) のピッチが JW の尾高型に干渉を起し、結果的には正しい JW のピッチの実現を妨げたということである。

	<u>肯定的干渉</u> JW に対応する KW	<u>否定的干渉</u> JW に対応する KW	<u>干渉の全体</u> JW に対応する KW
平板型	22/25 0.88	14/15 0.93	36/40 0.90
頭高型	27/34 0.79	3 / 5 0.60	30/39 0.77
中高型	7 / 9 0.78	5 / 8 0.63	12/17 0.71
尾高型	31/35 0.89	5 / 7 0.71	36/42 0.85
全 体	87/103 0.84	27/35 0.77	114/138 0.83

上の表で分かるように、全体的干渉の程度は0.83で非常に高い。干渉の内容が肯定的な場合が0.84で、否定的な場合の0.77に比べて若干高い。JW のピッチパターン別には、平板型がやや強い干渉を受けている。

KL が発音した JW に見られる母語 (KW) の干渉のもう一つの側面は、対象になっている JW が、K で同じ漢字表記で同じ意味を表すかどうかという点である。KW 1, KW 3, KW 5, KW 7 に対応する JW は K でも同じ漢字表記で同じ意味を表すが、KW 2, KW 4, KW 6, KW 8 に対応する JW は K で同じ漢字表記では同じ意味を表さない。これは、母語と同じ意味で使用されている漢字表記は、被験者に対応する母語の単語を頭の中に浮かべさせ、干渉を手助けする役割をするのではないかという予測から調査したものである。

KW の干渉を受けた JW が、K で同じ漢字表記で同じ意味を表す JW に対応する KW	KW の干渉を受けた JW が、K で同じ漢字表記で同じ意味を表わさない JW に対応する KW
92/108 0.85	22/30 0.73

分析結果は、予測通り、母語で同じ漢字表記で同じ意味を表す JW に母語は強く干渉した。

3. 問題点と今後の課題

本稿では、韓国語を母語とする日本語学習者を対象とした正しい日本語韻律の教育のため、単語における日本語と韓国語の韻律を対照し、母語の干渉の原因と程度を考察した。

本稿で明らかになったのは、次の二点である。

第一に、単語レベルでの日本語の韻律における韓国語の韻律の干渉は非常に強いこと。

第二に、干渉の内容別の程度は、次の三つに要約できる。

- ① 干渉の内容が肯定的な場合が0.84で、否定的な場合の0.77に比べて若干高い。
- ② 日本語の単語のピッチパターン別には、平板型がやや強い干渉を受けている。
- ③ 韓国語で同じ漢字表記で同じ意味を表す日本語の単語のピッチに、韓国語の単語のピッチは強く干渉する。

本稿での実験と、その結果を分析する際、困難な点もあった。韓国語ではピッチが意味の弁別機能を持っていないため、ピッチの先行研究が少ない。それ故、韓国語のピッチパターンに使用した用語の定義と、日本語でのピッチパターンの分類との関係が明確ではなかった。まず、この問題を解決し、今後、次の課題についてより深い研究が必要であろう。

- ① 対象とする日本語の単語を韓国人被験者が既知であるかどうかにより干渉の程度に影響があるか
- ② 同音異義語を実験の対象にして、干渉の傾向が一定かを調べる。もし一

定の傾向が見られるならば、干渉の典型的タイプの模索とその典型的タイプの条件が明らかになるであろう。

注

- 1 対象とした単語の中には「試験」、「芸者」のような漢字語も、「水」、「空」のような表記文字が漢字である和語も含まれている。本稿では、この両方を<漢字で表記された語>として、対象とした。
- 2 韓国語の韻律の特徴は、以下のように要約できる。
 - ①音節の強弱が音節の長さに関係する。即ち、一つの単語の中での強勢音節は弱勢音節より長さを持つ。
 - ②音節数と単語全体の長さは比例するが、正比例することはない。それは強勢音節と弱勢音節間の相対的な位置と弱音節の数により決定される。
- 3 本稿では共通語のソウル方言のピッチを標準とした。
- 4 日本人の被験者（2名）はJW175語の内、158語（90.29%）を同じピッチパターンで発音した。それに対して、KL（7名中5名以上）はKW175語の内、138語（78.86%）を同じピッチパターンで発音した。この分析の結果を見ると、KWには標準的なピッチパターンがあり、それはかなり強い規則性を持っていることが分かる。
- 5 韓国語のローマ字表記は、本研究が音声を対象にしているので、発音表記にした。

参考文献

- 天沼寧, 大坪一夫, 水谷修, 『日本語音声学』, くろしお出版, 1981
 文化庁, 『音声と音声教育』(日本語教育指導参考書Ⅰ), 1986 (第12刷)
 金 仁和, 「韓国語学習者の日本語韻律における母語の干渉—文レベルでの干渉—」, 文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究—外国人を対象にする日本語教育における音声教育の方策に関する研究—」平成3年度研究成果報告書『日本語の韻律にみられる母語の干渉(2)—音響音声学的対照研究—』, 国立国語研究所, 1992
 羅 聖淑, 「韓国語大邱方言の音韻—アクセントを中心に—」, 『言語研究』66, 日本言語学会, 1974
 関 光準, 「日本語と朝鮮語のアクセントとイントネーション」, 『講座日本語と日本語教育』3, 明治書院, 1990
 NHK (編), 『日本語発音アクセント辞典』, 日本放送出版協会, 1989 (第14刷)
 공일주, 「한국어와 아랍어의 악센트에 관한 음향음성학적 고찰」, 『한글』197, 1987
 김승곤, 『음성학』, 정음사, 1983
 南 廣祐, 『韓国語의 發音研究 [1]—순우리말과 漢字말의 標準發音을 중심으로—』,

—潮閣, 1989 (제 2판)

語文學資料 (論文) 集編纂委員會, 『國語學資料 [論文] 集 第1輯音聲學·音韻論 1970-1981』, 大堤閣, 1983

이현복, 「현대 한국어의 Accent」 (『문리대학보』 19-28, 서울대학교, 1973)

하시모토 만파로오, 「한국어 악센트의 음운론—특히 경상도 방언의 accent를 중심으로—」 (『한글』 151, 한글학회, 1973)

李 崇寧, 「現代서울말의 accent의 考察—특히 condition phonetique와 accent의 關係를 주로 하여—」, 『서울대 論文集』 9, 서울대학교출판부, 1959

이현복, 「한국어 단음절어의 억양 연구」, 『언어학』 1, 한국 언어학회, 1976

——, 「한국어 리듬의 음성학적 연구」, 『말소리』 4, 대한 음성학회, 1982

——, 「속도와 리듬에 따른 말소리의 변동」, 『語學研究』 18-1, 서울대학교 어학연구소, 1982

——, 「Visi-Pitch에 의한 운율 자질의 분석 고찰」, 『말소리』 9-1, 대한 음성학회, 1985

——, 「한국어 음성의 합성과 인식에 관한 음성·언어학적 고찰」, 『한글』 194, 한글학회, 1986

——, 「한국어의 표준발음」, 교육과학사, 1989

정인섭, 「우리말 악센트는 고저 악센트다」, 『중앙대학교 논문집』 10, 중앙대학교 출판부, 1965

Imagawa, H. & S. Kiritani, High-Speed Speech Analysis System Using a Personal Computer with DSP and its Applications to Pronunciation Training, *Ann. Bull. RILP*. 23, 1989

Hayata, Teruhiro, Accent in Korean: Synchronic and Diachronic Studies, 『言語研究』, 1974

Kim, Gyung-Ran, Tone at the Phrase Level, 『언어』 13-2, 언어학회, 1988